

## 和服における着崩れについての考察（第4報）

仲村洋子, 羽生京子

### The Study on deformation of dressing in KIMONO Part 4

Youko NAKAMURA and Kyoko HABU

和服着用時に生じる着崩れの要因を、長着の仕立て上がり寸法と体格・体型の関連と捉えて追求してきたのが、本研究である。

Lサイズを対象として取り上げ実験を試みた結果、「割り出し法」の有効性を確認した。身体に合わせて縫製された和服は、簡単に姿よく整えられかつ着崩れも少なく抑えられるとの感触を得た。この結果をうけて、試着衣を「ゆかた」としていたことにより省略していた長襦袢を着用して、実験を進めたのが前報である。長着はゆかたをそのまま用い、長襦袢はウール地、絹地の2種類を作製し実験を試みた結果、長襦袢着用が着崩れの抑制に効果的に作用し、さらに少量化が認められた。

現在での和服着装は、礼服や晴れ着といった盛装用が主流であり、長着を衿に仕立て、材質も絹素材を扱うことが一般的である。そこで、今回は衿長着を試着衣として採用することとし、表・裏地とも絹地を使用し、変動が明確になるよう格子柄を選んで作製した。あわせて、長襦袢についてもポリエステル素材によるものを加えた。

絹地で衿に仕立てた長着と、3種類の素材による長襦袢との組み合わせによる着崩れについては、前回のゆかたを用いた結果と同じレベルに留まっている。つまり、長襦袢の素材の如何をとわず簡単なしかも若干の手直しで修正可能な範囲であった。特に、衿元については長着を広衿に仕立てたことにより、手直しも必要としない微量に留まった。

以上、着装者の身体に合わせた和服であれば、着崩れは問題視するに値しないレベルであることが把握できたとともに、割り出し法の必要性を再確認した。

キーワード：着崩れ、Lサイズ体格、割り出し法、衿長着、長襦袢

## I 緒 言

着付けることで形づくる和服は、動きに伴って着崩れが生じる。この着崩れの主な要因として、仕立て上がり寸法と体格・体型との不一致と捉えて究明することを目的としている。

身体各部を計測して寸法を算出する「割り出し寸法」で縫製した長着であれば、腰囲100cmを超えるLサイズにあっても、容易にしかも整った着装が可能となる。結果として着崩れ量も手直しで処理できる範囲におさまることが確認できた<sup>1)~3)</sup>。

この結果をうけ、長襦袢の着用を加味することによって、着崩れへの影響を探ったのが前報である。ここでは、標準寸法では対処のむづかしいLサイズに絞ることとした。長着を着装する際には、ゆかたを除いて長襦袢を用いるのが一般的であり、着用することによって着崩れを緩和する効果が挙げられる。絹地、ウール地と材質の異なる2種の長襦袢を作製して実験を行った。階段の昇降にプラスしてラジオ体操を行うといったかなり動作の強化をしたにも関わらず、着崩れ量は想定以下の少量に停った。その要因として、一枚多く重ねたことにより生じた空気層が身体の動きを吸収し長着への影響を抑制したこと、あるいは肌襦袢・長襦袢・長着と3枚の布の素材間の抵抗・摩擦が増したことなどによると推測される。

長襦袢の着用による着崩れの緩和効果は明らかになったが、懸念されるのは、長着にゆかた地を用い単衣に仕立てていること、長襦袢が単衣仕立てに分類されるにしろ裕長着用であることの二点である。ゆかた地の使用については、長襦袢着用の影響を明確に把握するためにこれまでの実験と条件を同一に設定したことによる。しかしながら、この点については、和服における着装の常識といった約束事からすると、かなり違和感があり、著者らにとっても納得のいくものではない。加えて、最近の和服着装の実情を視野にいった時、かなり二極化した傾向がみられ、特に若い人にとっては、「ゆかた」か「振袖」に代表される盛装用の裕長着に限定されるといっても過言ではない。裕長着とは裏地のついた仕立て方で、表裏の布地に絹地を使用することが多い。長襦袢を着装上必要とするのもこの裕長着である。

こうした実態を踏まえて、今回は裕長着を採用することにし、表裏とも絹地を使用して裕仕立てにした長着を作製し着装実験を試みた。なお、合わせて長襦袢についても、最近洗える着物とし重用される化学繊維のポリエステル地によるものを作製追加した。

今回も被験者をLサイズに限定し、前報と同一人に協力を得た。

## Ⅱ 着装実験

### 1 被験者と仕立て上がり寸法

被験者は前報と同一人物であり、身長161cm、腰囲104cmでJIS規格のLサイズ以上に当たる。より正確な体型を把握するために計測した部位と寸法は第1表の通りである。

なお前報において、「尖椎よりウエストまで-2cm」の寸法を30cmとしたのは誤りで、実際は第1表(※)の通り38cmである。ここに訂正する。

第1表 採寸部位と被験者の寸法

(単位: cm)

	採寸部位	寸法		採寸部位	寸法
イ	身長	161.	ト	腰囲	104.
ロ	尖椎より床まで	136.	チ	掌囲	20.5
ハ	肩中央から乳まで	30.	リ	腕付根囲	45.5
ニ	ウエストから肩を通過してウエストまで	90.5	ヌ	ウエストから床まで	99.
ホ	尖椎よりウエストまで-2.	38.	ル	胸囲	103.
ヘ	首囲	37.	ヲ	胴囲	81.

これまでの着装実験により、身体に合わせた長着は着崩れが少ないことを確認した。そこで今回は、割り出し法で求めた寸法のみを実験対象とした。

長襦袢の上に木綿の単衣長着としてゆかたを用いて行った前回の実験との比較も重要なポイントであり、今回試着衣とした長着の仕立て上がり寸法は前報と同一の割り出し法および仕立て上がり寸法を使用した。ただし裕長着として仕立てたので、新たに袖口、裾のふき寸法を加えた。また裕長着の場合、衿は広衿に縫製する事が常であるため広衿とした。

一方長襦袢についても、ウールと絹素材の長襦袢は前報と同じ物を使用し、今回新たに加えたポリエステル地の長襦袢も他の2種と同寸に仕立てた。これはこの着装実験の目的である長襦袢の素材と長着の着崩れの関係を正確に把握するためである。第2表が割り出し法と仕立て上がり寸法（試着衣と長襦袢）である。

## 2 縫製方法

長着と異なる素材の長襦袢の組み合わせによる布の動きを観察するため、今回の長着の材料は一般に使用頻度の高い絹素材の反物を使用し、裕仕立てにより実験用試着衣を縫製した。裏の素材も絹織物を用いた。単衣仕立てとは違い厚さや摩擦なども含めて、長襦袢だけではなくもう一枚布が加わった状態も観察できる。写真による比較を主とする本研究においては、布の動きを正確に把握することが重要である。そのため格子柄の大島紬を選択した。胴裏は絹の羽二重、裾回しは同じく絹のパレスを用いた。

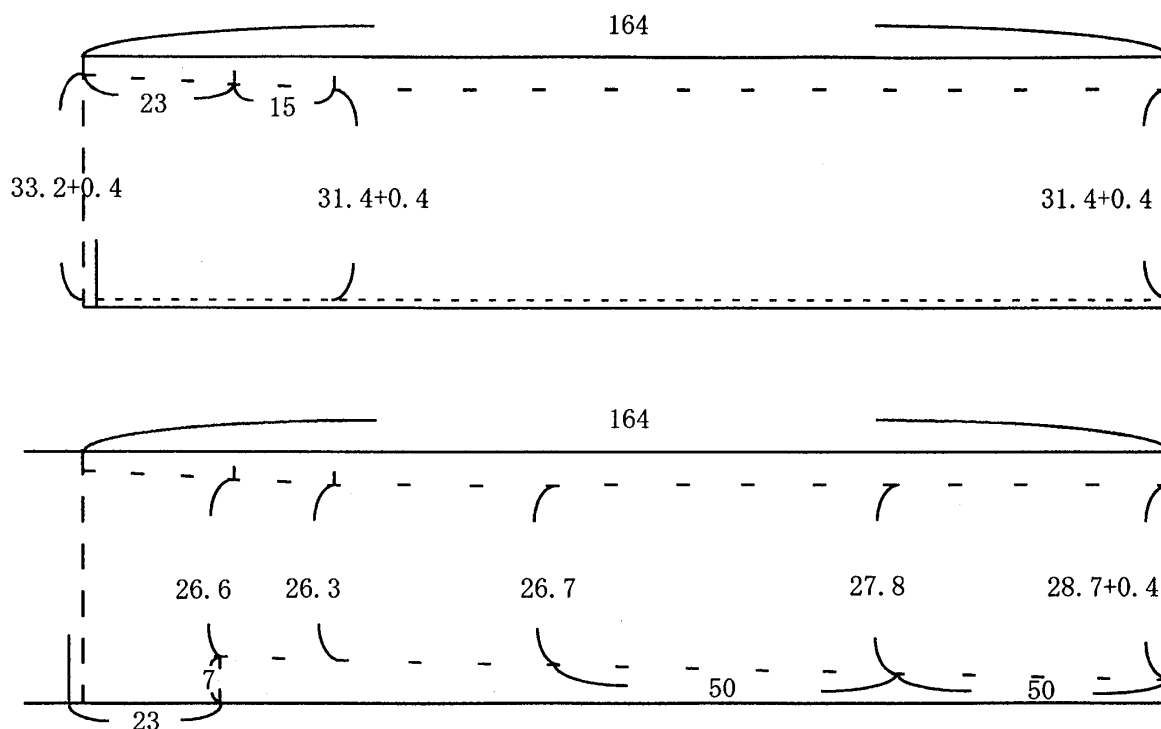
しるしのつけ方・縫い方はこれまで使用してきた裁縫書シリーズの一冊である、永野順子著『平面構成学実習Ⅳ』<sup>9)</sup>の「大裁女物あわせ長着」の項を参考にし、縫い方も省略することなく仕立てた。ただ、割り出し法により求めたLサイズの寸法は裾回し布において、幅の不足を生じたため、同じ布を繰り回して幅の確保をするべく接ぎ合わせた。つまり、衿先布を幅の補足布とし衿裏は胴裏で使用した羽二重布を当てた。裕に仕立てる場合は表裏の寸法を

第2表 割り出し法と仕立て上がり寸法(試着衣と長襦袢)

(単位: cm)

名 称	割り出し法	試着衣	長着との比較	長襦袢
袖丈	身長 $\times 1/3$	◎ 50.	長着 $-0.8$	49.2
袖口	掌囲 $\times 1/2 + 10. \sim 12.$	◎ 23.		
袖幅	衿 $\times 1/2 + 1.$ 内外	35.2	長着 $-0.5$	34.7
袖付け	腕付根囲 $\times 1/2 + 2. \sim 4.$	◎ 23.	長着 $-0.5 \sim 1.$	22.5
袂まるみ		◎ 2.		
身丈(裁切り)	身長 $+3.$	164.		
身丈	*身長 $\times 84/100$		着丈又は $-2.$	135.
衿肩明き(上がり)	首囲 $\times 1/4$	◎ 10.	長着 $-0.5$	9.5
繰り越し	(ニ-ホ $\times 2$ ) $\times 1/3$	◎ 2.	同寸	2.
身八つ口	掌囲 $\times 1/2 + 2. \sim 4.$	◎ 15.	同寸	15.
衿	*身長 $\times 4/10 + 4.$	68.4	長着 $-0.5$	67.9
肩幅	衿 - 袖幅	33.2	同寸	33.2
後幅	*腰囲 $\times 1.5 \times 1/2 \times 15/35 - 2.$	31.4	長着 $+1. \sim +2.$	●33.2
前幅	*腰囲 $\times 1.5 \times 1/2 \times 12/35 + 2.$	28.7	長着 $+2. \sim +3.$	●31.9
衽幅	腰囲 $\times 1.5 \times 1/2 \times 8/35$	17.8		
合づま幅	衽幅 $-1.5$	16.3		
衽下がり(肩山より)	ハ $-3.$	◎ 23.		
衿下	ヌ $-18.$	◎ 82.	身丈 $\times 1/2$	80.5
衿幅	規定寸法 (11.5)	◎ 11.5	規定寸法 (5.)	5.
下衿幅				※ 7.5
袖口ふき		◎ 0.2		
裾ふき		◎ 0.3		0.3
[備考] ・新たに採用した割り出し法。(※印) ・標準寸法を利用した数値。(◎印) ・下衿幅は使用した布幅の関係により7.5cmに規定した。(※印) ・長襦袢の後幅・前幅は肩幅との関係により変化させた。(●印)				

揃えることが重要である。そのため表身頃のしるしつけをする時、裾寸法、裾より50cm上、さらに50cm上、下身八つ口での幅、袖付けより剣先まで、いわゆる抱き幅とされる場所の合計5ヶ所を計り、裏身頃の幅を揃える。各部所の正確な寸法は着装時の身幅の状態を観察す



第1図 試着衣するしつけ図

るのに役立つと考え、ここにしるしつけ図（第1図）を示した。

一方今回追加したポリエステル長襦袢は、前回仕立てた絹の長襦袢と同じ形態の反物である。いわゆる並幅物であり絹の長襦袢と同様に、永野順子著『平面構成学実習Ⅱ』<sup>5)</sup>の「大裁女物ひとえ長じゅばん」の項を参考とし、「無双袖 裾引き返し 別衿仕立て」に作製した。

### 3 着装方法

肌襦袢と裾除けを着付けて長襦袢を羽織り、その上に袷長着を着装させた。これは“和服”を着装する時の一般的な順序である。特に長襦袢は着装の土台となるものであるので、次の事に注意して着装させた。

- 1) 上半身の背縫いは背中心に合わせる。
- 2) 肩山を肩線より2cm後方に決める。
- 3) 頸窩点直下に前面衿の交差位置を決める。
- 4) 身頃のゆとりは両脇に寄せる。

次に、この長襦袢に添わせる形で長着を着装させた。着装条件はこれまでと同じである。

- 1) 上半身の背縫いは背中心に合わせる。
- 2) 上前を決める時、左前身頃の衿下を右腰骨にあてる。

- 3) 腰紐の位置は腰骨より 2 cm上に締める。
- 4) 肩山を肩線より 2 cm後方に決める。
- 5) 上半身と下半身の衽つけ線を揃えるようにして、頸窩点直下に前面衿の交差位置を決める。
- 6) 身頃のゆとりは両脇に寄せる。

以上の6点である。しかし、明らかに無理と判断した場合は、自然な状態で着装させた。これより着装する際の長襦袢との組み合わせにより、以下のように称する。なお、肌襦袢と裾除けは表示の煩雑さを避けるために省略した。

着装A：ウール地長襦袢＋裕長着

着装B：ポリエステル地長襦袢＋裕長着

着装C：絹地長襦袢＋裕長着

#### 4 実験方法

これまで記述した方法によって縫製し着装させた試着衣のそれぞれについて、着装直後と動作後の着崩れを写真によって観察した。

- 1) 着装直後、前面、背面、両側面より写真撮影を行った。
- 2) 2階分の階段昇降を含む5分程度の歩行後、身体の動きが集約されていると考えられるラジオ体操第一を行い、1)と同様に写真撮影を行った。

この実験方法もこれまでと同様である。

着装直後および動作後の写真は第2図と第3図である。ただ、紙幅の関係により左側面写真は省略した。右側面の方がさまざまな問題点を持ち、比較検討により適していると判断したためである。

### Ⅲ 実験結果および考察

#### 着装直後

上記のように、同一の裕長着に対して3種の素材による長襦袢との組み合わせで着装実験を試みた。長襦袢の素材による着崩れを明確にするために、当然のことながら着装スタイルが同一になるよう留意した。着装条件に沿う順序の段階で、あるいは着装後に次のような部位で計測を行って着装させた。なお、長襦袢は頸窩点での衿交差位置を同一にするように配慮した。

- 1) 下前の折り返し位置：床から
- 2) 上前の裄先位置：床から

第3表 着装直後と動作後の計測値

（単位：cm）

	着 装 A		着 装 B		着 装 C	
	着 装 直 後	動 作 後	着 装 直 後	動 作 後	着 装 直 後	動 作 後
下前の折り返し位置	8.0	7.0	8.0	7.0	8.0	7.6
上前の衽褄先位置	8.0	5.0	8.0	6.0	8.0	7.4
腰紐位置	8.0	6.0	8.0	7.5	8.0	7.6
お端折り量	7.0	6.5	7.0	5.6	7.0	5.2
背中心位置	右に1.6	右に1.3	右に1.6	右に1.8	右に1.6	右に1.6
衽つけ線	右に1.6	右に1.0	右に1.6	右に1.1	右に1.6	右に1.4

3) 腰紐位置：衽先から腰紐位置まで

4) お端折り量：衽つけ線位置で帯下から、お端折り山まで

5) 背中心：お端折り山で上半身の背中心を基準とする

6) 衽つけ線：下半身を基準とする上下のずれ

以上の基準点における計測数値を揃えることで、完全とはいかないまでも、ほぼ類似の着装スタイルとなった。着装直後と動作後の計測値は第3表の通りである。

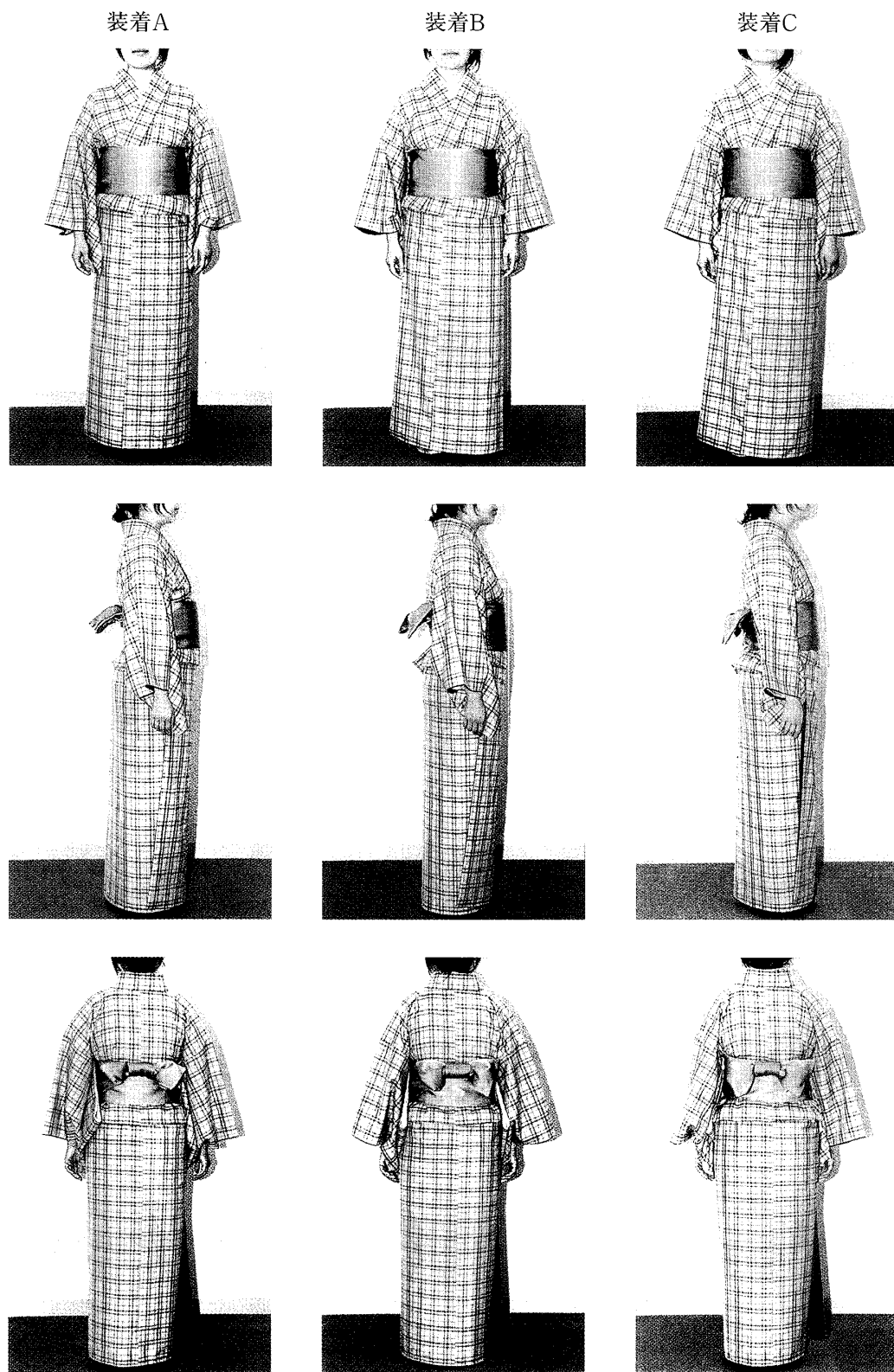
#### 動作後

動作後における基準点の変動値を参考にしながら、写真観察を主にして比較検討した。

着装Aの場合：上半身の変化で明瞭なのはお端折り量である。動作によって前・後身頃とも上に引っ張られて少なくなっている。衽つけ線での計測値は0.5cm減と僅かであるが、衽つけ線位置での移動は大である。その結果、前面衽の交差位置の格子模様が上方に移動し、側面から見た衣紋の抜け方が増している。後ろのお端折りが上方に動いたことは、背中部分のふくらみ具合でも判別できる。下半身については、上半身と比較して変化がやや多い。視覚的には上半身より少なく感じるが、数値によって大であることが確認できる。例えば、上前衽褄先の変動量は、3.0cmと今回の計測値中、最も変動量が大きく裾方に下がっている。

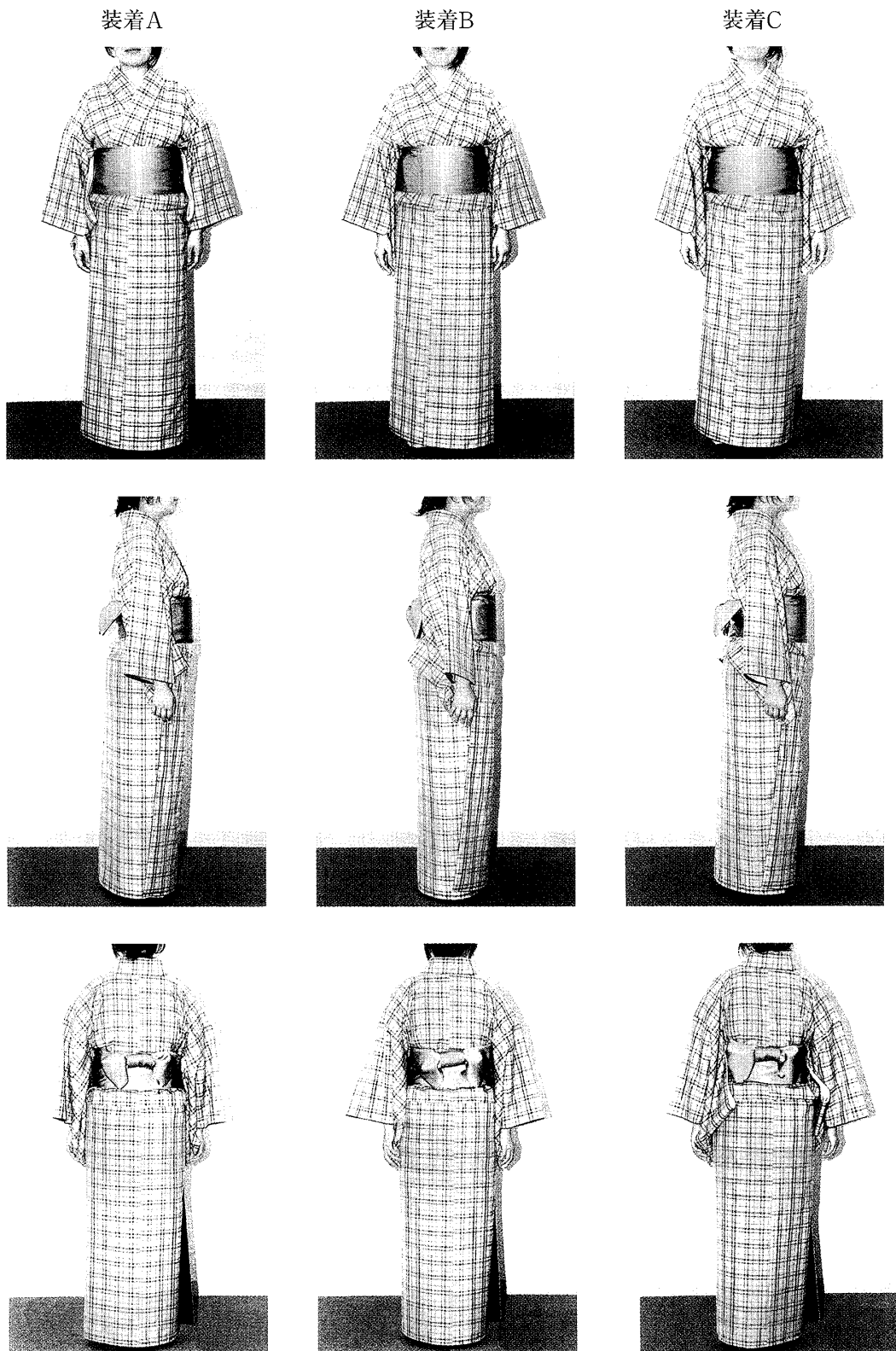
着装Bの場合：上半身、下半身ともA着装と変化の状態が近似している。視覚的には判別しづらいけれども、変動量については計測値によってAより少ないレベルであることが明らかである。

着装Cの場合：着装A・Bとは、やや異なる様相を呈している。



第2図 着装直後





第3図 動作後

上半身の変動が多く下半身が少ないのが特徴である。上半身については、お端折りの計測値が1.8cm減となり、他の2種に比べて微量とはいえ前面衿の交差位置の格子模様が上方かつ横にも広がって、長襦袢衿の見え方が増している。

下半身については、3種類の着装の中で最も変動量が少ない。明らかなのは上前衿棲先位置のずれであり0.6cmと極めて少ない範囲に留まっている。

以上3種類の着装について着装直後と動作後の変化を写真と計測値によって観察した。

それぞれの変化つまり着崩れについては、上述したようである。いずれの着装においても目視ではほとんど相違が認められず、計測値によらなければ判別しがたい範囲に留まっている。具体的に述べるとすると、その崩れは腰紐位置で上前衿を少し引き上げる、あるいは前・後ろのお端折り下部を持ち下方に引く程度の若干の手直しで解消可能な範囲である。また胸元にいたっては、そうした手直しも必要としない程である。和服という、衿をかき合わせる仕草を目にすることが多い。実際、和服の着崩れとして最も注視される部分といえる。縫製の項で触れたように、今回は、衿の形状を広衿とした。その効果があって衿は好みの幅に折って整えられ、かつ、抱幅が調整できたことで少量に納まったとの感触を得た。どこまでの変容を着崩れとするのか著者らにも定かではないが、極めて少ないレベルであることは明らかである。

今回、着装実験にあっては、腰紐・伊達締めの使用は最小限におさえ、必要以上に締め付けない状態に配慮して着用させたのにも関わらず、この程度に納まっている。しかし実際の着用場面では、着崩れを防ぐ対処法として、体型補正をするあるいは紐数を多く用いてきつく絞めたりなど対策を講じる。このようなことから推し量るとなのおこと、今回の結果以下に着崩れは抑えられることが予想できる。

変動は、微量であるとの結果がでているので不必要かとも思うが、敢えて今回のテーマの一つでもある絹地の長着に対して材質の異なる長襦袢の影響について触れておく。上半身・下半身トータルに見ると、変動の多い順位は、ウール素材の長襦袢を用いた着装A、次にポリエステル素材のB、絹素材のCとなる。但し、お端折りの変動に象徴される上半身だけを対象にすると、やや多いのが絹素材となる。いずれにしろ大した差異ではないのだが、すべりがよいので、着崩れしやすいと予測された絹が、下半身では変動が少なかったことは意外であった。

今回の実験においても、割り出し法によって縫製された長着、長襦袢を用いた。結果として、身体に合った和服着用のもとでは、長襦袢の材質の如何を問わず、着崩れは極く僅か、

しかも簡単に手直して収まる範疇にあることが確認できた。

## 総 括

袷に仕立てた絹素材の長着と、3種類の素材の長襦袢との組み合わせによる着崩れの度合いを探ったのが本研究である。いずれも手直して修正出来る程度の動きしか見られず、着崩れという程の変化は認められなかった。前回の木綿の単衣の実験でも同じことが言えた。このことによって着装者の身体に合わせた長着であれば、着崩れは起こりにくいことが把握でき、割り出し法の必要性を再確認した。ただ、著者らが手直しを加えながらも用いてきた割り出し法は、体格はカバー出来ても体型までは包括仕切れない状態であることが、着装条件を満たせない部分が存在することで分かる。痩せ型、肥満型、長身、短身などの体格に、バストが大きい、ヒップより太股が張っている、また腰骨が横に張ったような偏平型であるなど、組み合わせると人の身体は実に千差万別である。この体格・体型に合わせて長着を仕立てるためには、仕立て上がり寸法もさることながら、丈や幅などの条件を満たす反物が必要となる。実際、今回のLサイズの試着衣では裾回し布の幅不足が生じた。クイーンサイズと呼ばれる布が出回ってきたとはいえ、まだ種類、数量も少ない。現在多く市販されている布で縫製する方法の研究も必要であろう。さらに現在においては着装自体の変化を感じる。普段着であった和服は、日常の動きに支障のない様に袷先を引き上げて着装していた。裾つぼまりと言いながら、下半身のシルエットはセミタイトの様を呈していた。しかし一般的に日常着でなくなった現在の和服は盛装に着用することが多いためもあってか、立ち姿を最も重要とし、以前程袷先は上げず、衿下はほとんど脇線に沿うように着付ける。また裁縫書によっては脇線を内側に入れて、仕立てる時から裾つぼまりにする方法を記載しているものもある。このように纏うことで形作る和服であればこそその問題を多く抱えている。

これまでの着装実験により、体格・体型を考える上で一番目立ち、布の動きが大きいのは前面であるとの感触を得た。体型と反物の幅と着装の関係を、衿の交差位置、身幅のゆとり、蹴回し幅などを含め、衽付け線位置の検討を縫製の面から追求していきたい。

### [付記]

本研究を作製するにあたって、平面構成研究室の伊藤瑞香氏、山口直子氏、拜詞彩華氏のご協力を得た。

## 文 献

- 1) 仲村洋子・羽生京子：和服における着崩れについての考察 和洋女子大学紀要 43 家政系編 37～51 (2003)
- 2) 羽生京子・仲村洋子：和服における着崩れについての考察（第2報）和洋女子大学紀要 44 家政系編 11～26 (2004)
- 3) 仲村洋子・羽生京子：和服における着崩れについての考察（第3報）和洋女子大学紀要 46 家政系編 13～27 (2006)
- 4) 永野順子：平面構成学実習Ⅳ 衣生活研究会 5～56 (1984)
- 5) 永野順子：平面構成学実習Ⅱ 衣生活研究会 90～138 (1984)